

# 原水爆禁止 2022年 世界大会

## 核兵器のない平和な世界を

人類と地球の未来のために

### 核保有で脅威は高まる

### 求めるべきは全面禁止と廃絶

7月25日に結団式を行なった東京土建代表団は、地域から参加している各支部の仲間たちとともに、8月4日～6日に開催された原水爆禁止2022年世界大会（広島大会）に参加してきました。新型コロナの影響で3年ぶりの開催となりましたが、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻で核兵器使用の緊張がますます高まるなか、広島県立総合体育館（グリーンアリーナ）とオンライン視聴による参加者たちは、被爆75年を振り返り、「核兵器のない平和で公正な世界」の実現に向けて、歩みを止めることなく進み続けることで意思統一しました。



フィナーレでは参加者全員で短冊を掲げて広島宣言を承認

8月4日から9日、原水爆禁止世界大会実行委員会の主催で「原水爆禁止2022年世界大会」が、3年ぶりに被爆地の広島と長崎で開催されました。東京土建の代表団は、4日から6日の広島大会に参加しました。4日午前の開会総会冒頭、同大会実行委員会運営委員会の野口邦和共同代表は、被爆者健康手帳を保有する被爆者の平均年齢（2022年3月現在）が初めて84歳を上回ったことを報告。そして、同被爆者数は11万8935人と、初めて12万人を下回ったとし、被爆者の高齢化が進んでいることに触れ、被爆75年の今年、「生きていくうちに核兵器をなくしてほしい」との被爆者の訴えを真摯に受け止め、被爆の実相を大きく国内外に発信し、核兵器の全面禁止と廃絶に向けた運動のさらなる発展を強く求めました。午後のセッションIIには、現在争いが続いているウクライナとロシアの代表がオンラインで登場しました。ウクライナ平和主義運動事務局長のユーリイ・シェリアセンコさんは、「ウクライナ

は核兵器を捨てたから攻撃された。核兵器を手放したのとは間違った」という主張に對して「核兵器を保有すれば、核戦争に巻き込まれる危険性が高くなるから」とのこと。インドやパキスタンの例に見られるように、核兵器保有の事実だけで戦争を防ぐことはできないと言います。フィンランド湾南岸公共評議会のメンバーであるロシアのオレク・ポドロフさんは、今ウクライナで起きているのはロシアとNATOの対立だと見えています。ウクライナに多くの友人を持ち、半分ウクライナ人の妻がいるオレクさんは、この5カ月間を「まるで自分の右手が左手を攻撃して破壊しているようだ」とし、正気の沙汰ではないと発言しました。

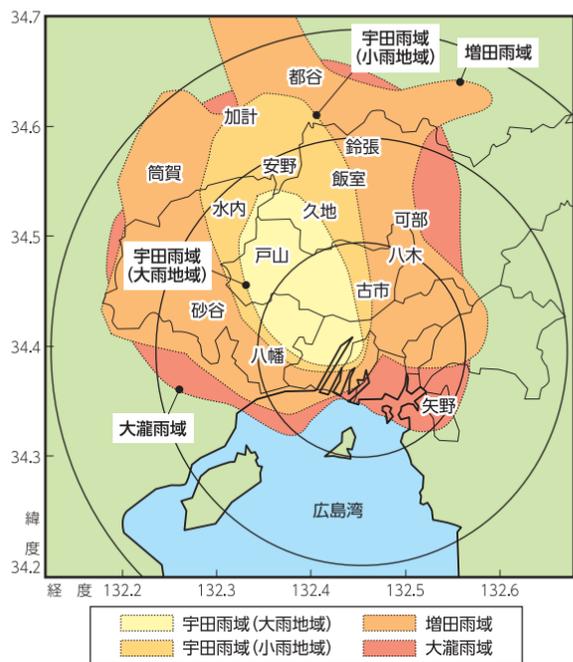
#### 唯一の被爆国に相応しい役割を

2日目の午前はセッションの続き、午後は7つのテーマ別集会和碑めぐりなどが行なわれ、被爆75年の歴史を学び、考察を深めました。最終日の6日は、ヒロシマ

デー集会を開催。「被爆75年 被爆地ヒロシマから世界へ」、「核兵器禁止条約に参加する日本を」国会議員との対話」と題した特別企画などのもと、広島宣言が提案されました。

唯一の戦争被爆国にふさわしい役割の発揮を強く求め、日本政府に対して核抑止力論から脱却し、核兵器禁止条約への支持、参加表明を要求したこの宣言は、フィナーレで短冊を掲げた参加者全員から採択されました（左上写真参照）。こうして、平和への新たな決意表明がなされ、閉会となりました。

### 被爆者に救済認められた「黒い雨」訴訟の問題点



広島原爆による黒い雨降雨図

大会2日目の8月5日午後、広島YMCA2号館で開催されたテーマ別集会のなかで、在韓被爆者と日本の被爆者による学習、討論が行なわれました。日本側からは「黒い雨」訴訟団の竹森雅泰弁護士事務所器について考えているかも、と感じました。と同時に恥ずかしい気持ちになりました。2日目の質疑と討論コーナーのなかで、小学6年生の女の子が次のような発言をしました。「千坂純さん（日本平和委員会事務局長）の話を聞いて、岸田首相が何をしようとしているか、本当のことが分かって衝撃を受けました。テレビや新聞、学校の授業や先生も教えてくれなかったことです。私は今日聞いたことを学校で友だちに伝え、話をしたい。」

### 「本当のこと分かった」小学生の発言で未来明るく

【東京土建代表団 長・石村英明記】今回初めて、広島大会に3日間参加しました。まずは世界大会というだけあって12カ国18人の海外代表が同じ想いで参加していること、もしかしたら日本人の私たちよりも核や核兵



石村さん

### 参加者がヒロシマで感じたこと

この発言を聞いて、日本の平和運動の未来は明るく、うれしく思いました。



三浦さん

【西多摩支部女性の会長 三浦幸子記】今回、一番楽しみにしていたのはテーマ別集会です。内容を見て迷わず参加を希望したのは、ロシア

### 世界の仲間と共有 歩み続ける決意新たに



小学6年生の女の子の発言を堂々とする

とウクライナの代表と交流する集会でした。今まさに戦争中の両国で反戦活動をし、メディアでは伝わらない生の声をオンラインで響け、聞けることができ、とても勇気が持てました。ロシアの女性活動家アーシャ・マルケットさんが「平和と愛は贅沢品であってはならない」と語り、与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』（日露戦争に出征する弟に生きて帰れと書いた詩）をロシア語で朗読し、同時通訳されたのが特に印象的でした。3日間、核兵器廃絶の想いを世界の仲間と共有してきました。今後も被爆者とともに平和への行動を伝え、歩み続けなければならない決意を新たにしました。

### 被爆者差別などで申請が難しく

最終日の8月6日、特別企画Iの初めに、1歳5カ月の時に「黒い雨」に遭った被爆者から発言がありました。幼少期で記憶がなく、また先輩や友人が結婚直前に相手の親から「被爆者だから」という理由で破断になるなどの被爆者差別などの理由から、手帳申請は難しかったということでした。被爆者から76年も放置されてきた「黒い雨」被爆者に、今年4月から国は新基準に基づき救済制度を開始しましたが、広島高裁判決が否定した疾病要件を設けたり、長崎の被爆体験者を対象外とするなど、また問題は残されています。